

“おもしろくて ためになる 学びの共有”  
わかちあい

秋田県教育カウンセラー協会機関誌

# 教育カウンセラー あきた

第23号

2015年（平成27年）7月4日発行

## 学力観の地殻変動

秋田県教育カウンセラー協会  
代表 濱田 眞

次期学習指導要領に向けた基本構想が明らかにされました。それは「コンテンツ型学力からコンピテンシー型学力への転換」、分かり易く言えば「何を知っているか」から「それを使って何ができるか」への転換です。大学入試もドラステックに変わります。センター試験（コンテンツ型，教科型）が廃止され，2020年には大学入学者学力評価テスト（コンピテンシー・総合型）が導入されます。今年中学校に入学した子どもたちが受験することになります。文科省は本気です。

日本だけではありません。EUの「キー・コンピテンシー」，イギリスの「キースキル・思考スキル」，オーストラリアの「汎用的能力」，アメリカの「21世紀スキル」等，地球の至る所で同時多発的に学力観の地殻変動が起こっているのです。その大きな要因はグローバル（知識基盤）社会の到来です。今年小学校一年生に入学した子どもが大学を出る頃には，現在の職業の65%が消滅しているだろうと予測されています。産業構造の大転換に伴って，求められる学力も当然変わります。急速に変化する社会にしなやかに適応する能力，つまり「汎用的資質能力」が求められているのです。

21世紀社会を生き抜く力の中で，OECDが特に重視しているのが「社会情緒的スキル」です。それは，目標達成（忍耐力，自己調整，目標への情熱，信頼性），ストレスへの対処（穏やか，沈静，楽観主義，自信），他者との協働（親密性，尊敬，親切さ・援助，気遣い）から成り，基礎スキル，認知スキルを使いこなす社会適応を可能にする力です。

昨年2月に仙台市で行われたOECDジャパン・東北セミナーのメインテーマが，この「社会情緒的スキル」の育成でした。東日本大震災の被災地の子どもたちが福島に集まり，震災復興に向けたアイデアを考え，具体化し，実践しました。そのプロセスにおいて子どもたちの社会的情緒スキルが大幅に向上したことが報告されました。東北セミナーの成果はOECD本部・パリで発表され，フランスの方々からも絶賛されました。

社会情緒的スキルは，教育カウンセリングの資質・能力とほぼ重なります。教育カウンセラー協会は，長年にわたって学習指導と生徒指導を一体的に捉えた全人的教育を研究・提唱してきました。コンピテンシー育成には学力観の転換が不可欠です。それは認知心理学等，最新の心理学的知見によって可能になります。ますます多忙化する教育現場にありながら，寸暇を惜しみ，身銭を切って研修会に参集されている方々に深く敬意を表します。皆さんの努力が新時代の教育を切り開く原動力となることを切に願います。



## 「大学生の進路選択について」

連日、地方の人口減少や少子高齢化社会に関する問題が報道で取り上げられています。当然のことながら、これからの時代はこれまで以上に社会の変化が激しくかつ流れが速く、価値観も多様化し、生活スタイルも大きく変わることが予測されます。この次の世代を担う若者には、この大きな変化を見通し、逆に変化を楽しみながら新しい価値観を創造して欲しいと願っています。今の若者の進路選択の状況や、大学を中心としたキャリア教育・職業教育についての現状等に触れてみたいと思います。

大学（学部）卒の就職状況は、平成26年度の文部科学省の学校基本調査では、全国の大学（学部）を565,573人が卒業し、そのうち、「非正規雇用」、「一時的な仕事についてのもの」、「進学も就職もしなかったもの」の合計は10万5000人を超えています。統計を始めた平成24年度から3年連続で10万人以上の若者が不安定な雇用や就職をせずに卒業を迎えています。その一方で、業界によっては採用予定人数を確保できずに新年度を迎える企業も多数存在します。また、早期離職傾向も続いており、3年以内に離職してしまう割合は、平成23年度に就職した大学（学部）卒業生では32.4%に上ります（厚生労働省職業安定業務統計）。

価値観や社会構造が多様化したなかで、すべての人がある一定の年齢で、就職をし、定年まで同じ職場で働き続けることを求めることはできない時代です。ただ、これらのデータの背景には「進路の先送り」にも繋がる「自己決定力の不足」と「視野（思考）の狭さ」が少なからずあると感じています。大学において学生に接するときや講義のなかでは、このことを念頭において、「自分で決めてみること」「視野を広げてみること」「様々な価値観を受け入れること」ができる仕掛け作りも必要になってきています。

大学等への進学率が50%を超えるようになり、その中には特に目標を持たないま

ま、「周りが行くから」と入学する学生が増えてきていることも周知のとおりです。このことを踏まえ、今、各大学では学生が大学生活のスタートをうまく切ることができ、自ら行動し進路選択ができるように独自に入学前教育、初年次教育などのプログラムを構築し、それらと連動して「キャリア教育・職業教育」が実施され卒業後の進路選択への流れを作っています。

進路選択のひとつとしてのインターンシップが大学3年生の夏から本格化し、就職活動が本格化する冬以降、学生たちは内定ができるまで連日就職活動に明け暮れます。就職活動が始まる前の大学2年生を終える頃までに、ある程度自分の方向性や長所を明確にしていく必要があります。

入学後の早い時期に就職活動の時期や方法を伝えることで、多くの学生は、限られた大学生活でしかできないことを見つけようとするようになります。また、学生のうちに数多くの失敗をしてみることや、違う価値観に触れる大切さを伝え続けることも大切だと考えます。学生は「失敗すること」「ほかの人と違うこと」に対して敏感です。「社会では、たくさん失敗した経験値と、個性が求められている」ことを伝えると、安心するのか挑戦を始めることが多くなります。

また、学生は企業選択に際して、自分の適性よりもテレビCMなどで「知っている」企業に偏りがちです。早期離職の背景には、このミスマッチがあると思われます。日本を支えている業種や職種に数多く触れる機会を早期に提供することも大学教育の一つの役割になってきています。

大学生に、影響を受けたり尊敬している人を聞いてみると、多くは、小中高校の担任や部活動の先生を挙げます。育ててこられた先生やその他の方に敬意を払いながら、すでに人生を支えてくれる言葉や心の拠り所を持ちながら生きていたり模索している学生一人一人と真剣に向き合い、背中をそっと押す意識を忘れないことが大学のキャリア教育で一番大切なことなのかもしれません。

（協会理事 前学校法人

ノースアジア大学 熊谷朋子）

## 生徒の一言からの授業改善

### 1 はじめに

本校は、平成23年、湯沢北高校と湯沢商工高校を統合し、普通科、総合ビジネス科及び工業技術科の3学科（6クラス）を有する総合制高校として開校した。生徒の学力幅や進路希望は多様であり、学科構成の特徴から様々な場面で個に応じた指導が必要となる。生徒の進路希望に対応させた学科・コースの充実を図るため、就職希望者が多数を占める総合ビジネス科・工業技術科の両学科の進学者を対象に、「国語実践演習Ⅰ・Ⅱ」（学校設定科目、2～3年時継続履修）が選択科目として盛り込まれている。

しかし、上記科目選択者は10人未満と少なく、その進路希望も4年制大学や短大・専門学校、公務員と多様だ。進路希望に対応できる実践的な国語の学力向上を掲げてはいるが、国語でありながら「教科書」が無く、授業内容及び進度は授業者に委ねられている。

### 2 生徒の一言

教科書が無いので、当初は問題集を利用した演習や小論文演習を中心に授業を展開していた。しかし、生徒の反応は今ひとつ。その気力の無さの原因を生徒たちに尋ねてみたところ、こんな答えが返ってきた。「だって先生、『やらされている』から面白くないんですよ。」この言葉を聞いた瞬間は、正直ショックだったが、生徒がそう思っている以上、効果の無い方法を繰り返しても学力は向上しない。この生徒の一言を手掛かりに、「やらされている」感のない授業、「生徒が主体的に活動する授業」を目指し、実践することにした。

### 3 実践例

#### 3-1 ディベート

教師主導から生徒主導の授業への転換を目指し、まず、最初に授業に取り入れた方法が「ディベート」だ。ディベートは、特定の論題に対して無作為に肯定・否定に分かれ、一定のルールのもとに話し合い、ジャッジが勝敗を決定する競技としての討論である。生徒には「論理を戦わせ、説得力を競う言葉のスポーツだ」と説明した。すると、生徒らが最も興味を示した事柄は「勝敗が決まる」ということだった。「どうせやるなら勝ちたい」という気持ちが彼らの原動力となり、回を重ねる毎に討論は白熱していった。最終的には授業者が指示せずとも、「勝つために」自主的に放課後残っ

て情報収集をし、選択者ではない級友まで巻き込んで討論内容を考えてくるようになった。

#### 3-2 どくしょ甲子園

「どくしょ甲子園」は、1冊の本をもとに4人程度のグループで読書会を開き、その成果を引用文や感想、イラスト等を交えて1枚の画用紙に「どくしょボード」として表現するコンクール（朝日新聞社主催）である。このコンクールに、『舟を編む』『神去なあなあ日常』（共に三浦しをん著）2作品の読書ボードを作成し、応募した。入賞には届かなかったが、活動を通して、「1冊の本を真ん中に話し合うことの楽しさ」を生徒とともに味わうことができた。

#### 3-3 ビブリオバトル

「ビブリオバトル」とは、参加者が読んで面白いと思った本を順番に5分程度で紹介し、全ての紹介終了後、「一番読みたくなった本」を参加者全員で投票し、最多票を集めたものを「チャンプ本」とするものである。県内の高校生を対象にしたバトルは、小規模ではあるが各地区で開催されている。授業で取り入れたことをきっかけに本授業の選択者男子3名が県南大会に参加、その内1名の紹介した『100歳の少年と12通の手紙』が準チャンプ本に選ばれた。

### 4 活動評価及び今後の展望

生徒の一言から出発し、この2年間授業改善に努めてきた。様々な活動を通し、生徒の論理力・表現力の向上に一定の成果を上げたことができたと思う。何より、生徒はいつでも「楽しそう」であった。そして、授業者である自分自身が楽しんで授業をデザインすることができた。まさに本協会のモットーである「おもしろくてためになる学びの共有」の素晴らしさを生徒とともに体験できたと思っている。昨今は、授業改善の方策としてアクティブラーニングを取り入れる高校が増えてきている。今後とも様々な方法を取り入れつつ授業改善に努めていきたい。



（協会会計長 初級教育カウンセラー  
湯沢翔北高等学校教諭 高橋 智子）

📖📖📖 **養成講座 講師の先生のご著書紹介** 📖📖📖

**岡田 弘先生**（東京聖栄大学 教授）

「**小学校人間関係づくり エクササイズ&ワークシート**」（学事出版）

豊かな心の育成のための体験活動・教育力・わかる授業・絆づくりに対応したさいたま市・川崎市による人間関係づくりのための教育実践集です。どの学級担任も無理なくすぐに実践でき、ワークシートが付いています。（学事出版 HP より）

**鹿嶋 真弓先生**（高知大学 准教授）

「**中学校学級経営ハンドブック**

—学級環境づくり・仲間づくり・キャリアづくり」（図書文化社）

「環境・約束」「信頼・仲間」「キャリア」の3つの柱に沿って、クラスの生徒が必ずのってくる失敗しにくい実践やエクササイズを厳選しています。また、忙しくても、各学年・各時期のねらいとやるべきこと、活動のレパートリーが、一目で確認できます。

人の中で人は育ちます。各学年の生徒の特徴やかかわり方のポイントがつかめ、学級担任をもつことが楽しくなります。（図書文化 HP より）

**岸田 幸弘先生**（昭和女子大学准教授）

「**子どもの登校を支援する学校教育システム**

—不登校をのりこえる子どもと教師の関係づくり」（福村出版）

不登校問題と学級づくりを関連させた研究は少ない中、本書では、不登校児童生徒への支援と、登校を促す魅力ある学級づくり等の教育実践とそれを支える学校教育システムを論考しています。（福村出版 HP より）

**松井 賢二先生**（新潟大学教授）

「**ワークシートで創る！中学校3年間のキャリア教育・進路指導**」（東洋館出版社）

たしかな職業観・勤労観を育てるために、今こそキャリア教育を！キャリア教育・進路指導は、職場体験活動のみで終わらせることなく、発達段階に即した継続的な指導が必要です。本書は、ワークシート形式にすることで、より系統的・効果的な取り組みを可能にしました。

（TRC MARC より）

**諸富 祥彦**（明治大学教授）

「**図とイラストですぐわかる教師が使えるカウンセリングテクニック80**」（図書文化社）

欠席がちで不登校になりそうな子がいる。学級がザワザワしていて真面目な子の元気がなくなっている…。現場の教師が直面する問題に対して、すぐに使えるカウンセリングテクニックを、イラストを用いてわかりやすく紹介しています。（TRC MARC より）

## 編・集・後・記

今回の機関誌に掲載された高橋智子先生の実践は高校での実践例としてたいへんおもしろく読ませていただいた。私たちの全ての実践は、まず子どもがいてこそその活動なのだということを再確認させていただいたからである。子どもたちが楽しくないことや嫌々やっていることは身になるはずがないのである。子どもありき、そこが原点ではないかと考える。楽しく、様々な人とコミュニケーションをとれる力を身につけていくことが大切であると思う。まずは身近なところから始めたい。（Y）